

吉岡洋とゲストによる
哲学とアートのための 12 の対話 2024

土曜の放課後

第8回

岡田暁生 × 吉岡洋

第8回 〈教養〉について考えてみる

岡田暁生 × 吉岡 洋 （進行 植田憲司）

植田 時間になりましたので、土曜の放課後、第8回を始めたいと思います。司会を務めます植田憲司です。よろしくお願いいたします。

今日のゲストには京都大学人文科学研究所の岡田暁生さんにお越しいただいております。岡田先生は音楽学、特に西洋音楽、クラシック音楽を専門とされております。多くの本を出されておりますし、テレビ番組にも多く出演されており、坂本龍一さんの「スコラ 坂本龍一 音楽の学校」(NHK 2010–2013) は中でも有名かもしれません。ちょっと個人的なことなんですけれども、岡田先生とは実は京都大学の人文研の同じ共同研究班で一緒なんです。実はコロナ禍の2020年の共同研究だったので、高階先生の共同研究で、そこでご一緒していたんですけれども、多分私の顔は認識されていなかったかなと思うんです。ZOOMの研究会ばかりだった時期だったんですけれども、その中でも岡田先生の研究発表、「20世紀初頭のドイツの音楽評論家のパウル・ベッカー」、その研究発表をお聞きしまして、私は美術畑なんですけれども、軽妙な語り口がすごくかっこよくて、密かにファンになってしまったという経緯があります。

岡田先生は専門的な研究者はもちろんなんですけれども、一般の人にも読みやすく、届きやすい本を多数出されております。一見して平易な語り口で実直な語りなんですけれども、とても深い問題、射程も長いような問いに対して、膝を打つような大きなお話を多数披露されておられる感じがします。引き込まれるような文章がいいなと思っておりました。

今回紹介するために岡田先生のことを少しネットで調べておりましたら、岡田先生の文章がいろいろな大学の入試問題とかにも採用されていたり、あるいは国語の教科書にも採用されていて、やはり良い文の書き手は広く理解

されるんだなと納得しておりました。

ちょっと変わったところだと、フェリス女学院中学校という中学校の入試問題にも採用されていて、小学校6年生に岡田先生の文章を読ませたという、ちょっとこれは幸か不幸かよくわからない感じではあったんですけども、そんなこともあったので、ぼくとしては小学生で岡田先生に出会うというのは圧倒的に幸せなのかなと思ったりしておりました。

そんな岡田先生は中公新書から4冊も実は出されていて、ここに2冊ほど持ってきたんですけども、『オペラの運命』という本ではサントリー学芸賞を取られておられたり、その後『音楽の聴き方』という本、これは新書大賞の第3位でベストセラーになっていると思うんですけども、すごく良い本で。その後も『音楽と出会う——21世紀的つきあい方』、これはここ30年の音楽の受容の環境の変化を鋭く書かれた本で、AI作曲とか、癒し音楽、ネット動画とか、すごい幅広い分野のことを題材を切っていかれているというふうなものになっています。そこへ来て4冊目がコロナ禍に入った2020年に『音楽の危機』というふうなのを出されていて、このサブタイトルが「第九が歌えなくなる日」という、ちょっと話がすごい挑戦的なタイトルの本が出されていて、これで小林秀雄賞を受賞されております。

そんな岡田先生をゲストにお招きして、今回のテーマは「教養について考えてみる」です。まずは前半60分ほどが対談で、10分の休憩を挟んで質問の時間になります。それでは岡田先生と吉岡先生、どうぞよろしく願いいたします。

吉岡 今日はこんな悪天候にしては、すごくたくさんお集まりいただきありがとうございます。今回のゲスト紹介はいつになく力が入っていて、ぼくはこれ以上申し上げることはありません。いつものように最初30分ほど岡田さんにお話しただいて、その後休憩までぼくら二人で対談という進め方にしますので、よろしく願いします。

岡田 吉岡さんの方から、これまで登壇された方がみんな、例えば「日本と

は何か」とか大きなテーマを扱っているので、大きく出ると言われて、教養にしろって言われたんですけれども、教養というのはある意味では大変流行らない言葉ですよ。 「教養なんて何かの役に立つのかな？」みたいな。

だけど、それでもファスト教養みたいなものが流行していることを考えると、やはりみんなそれを不要とは思っていない。 だけど流行らない、「それが何の役に立つの？」という目で見られていることも確か。 とりあえず音楽というのは教養の一つ、無用の花鳥風月としての教養の最たるものの一つと言っていいと思うんですけれども。 その音楽を研究などしてきた私自身は、まあ役に立たないことをずっとやってきたと言えないこともない。

それで、教養というのは学部で言えばかつての教養学部（今は京大では別の名前に変わりましたけれども）と文学部の領域でしょう。 経済学部とか法学部は決して教養を教えるところではない。 けれども文学部といっても、歴史系は決して無用とか言われることはないでしょう。 歴史学をなくせなんていう人はまずいないだろう。 歴史が何の役に立つのかと言う人はいるかもしれないけれども、役に立たない不要不急の教養だと歴史をみなす人は少ないだろう。

それから哲学も結構しぶとい。「いかに人生は生きるべきであるか」という、お坊さんのような役割として、それなりに哲学にニーズはある。 その意味では、芸術の中でもいろいろグラデーションはありまして、美術史とかでも「何の役に立つんだ？」と言う人、意外と少ない。 例えば贋作かどうか調べる必要があるとか、あるいはその民族のその社会の遺産、大切な文化遺産を守っていかなくちゃいけないから、だから美術史が要るんだろうとか、それなりに実学なんですよ。

そこに行くとか音楽の研究などというものは不要不急の教養の極北で。 忘れもしません。 神戸大学に勤めていた時ですね。 ちよつと時間がなかったものですから、タクシーに乗ったんです。 運転手さんが話好きな方で、何か色々聞いてくるんです。「先生、何教えてはりまんのや？」と聞いてきて、「この方向やばい…」と思って生返事してただけど、とうとう仕方なしに「音楽です」って言ってしまったんですね。「音楽ってピアノか何かでっか？」とき

たわけです。つまり実学＝ピアノの弾き方を教えるというんだったら、大学で教えるって割とわかるみたいなんですよ。決してそこで「音楽の歴史でっか?」とはこない。「音楽です」って言えば、ピアノの弾き方を教える、せいぜい作曲を教えるというところどまりになる。しかし今から思うとこのタクシーの運転手さんは 大変本質をついた質問をしてきたんですね。この運転手さんが言うには、「音楽ってそんなもん教えられるんでっか?」と。そして「芸術なんて『先生がこうしろ』言うたらその通りにする、それだけちゃいますのん? そんなん大学で教えられるもんですか?」と聞いて…。もちろん私は答えに窮した。このエピソードはもう30年近く前の話ですが、以来私はずっと「なぜ大学の中に音楽研究なんてあるのか?」と自問し続けてきたように思います。

いまどき大学では「実学だけでいい」という圧力はすごい。文系ないし教養系の学問はこの「なんの役に立つんだ!?!」という問いに対してどう説明しようかって、右往左往している。でも私はこんなこと大学に就職してきたときからずっと考え続けてきたという自負があります。自らの存立を問い続けるというのは、弱小学問の大いなる利点です。

さて、私は「教養がなぜ必要なのだ?」と聞かれたとき、「無用の長」という理屈でもって説明しようとする人が大変多いことをよく知っています。長期スパンだとか、短期的に見ない視点が必要だとか。

しかし、この理屈というのは、私に言わせればもうかなり擦り切れている。「近視眼的に陥らないためにも、長期的な学問が必要である」とかいう理屈はもう聞き飽きた。私は、実は教養というのは、強烈な実学性を本当は持てるはずだという意識を強く持つてきました。教養というのは一見役に立たないと見えるかもしれないけれども、しかし実際は教養を持っている人間と持っていない人間とではものすごく差がつく人生の局面があるよと言いたい。「人生を生き抜くためには、情報だけだったら貧しいよ、貧すれば鈍するだよ、損するよ」と言ってもいいかな。必要最低限にプラスアルファがあるといういろ役立つ、教養とはそういうものではないでしょうか。

まず「実学としての教養」は、すごく表面的に言えば、国際的エリート層の文化という側面が確かにある。アメリカのエリート教育では教養教育は非常

に重視されているしね。ビジネスの話をしたらそこでおしまいという、それだけだったら継続的なビジネスのできるはずがないですよ。仕事だけのレベルで。やはり人間的にちょっとこいつと、もうちょっと話してみたいなと思わせるかどうか、これは実はすごい重要な点だと。しかし日本のエリート教育には決定的に教養教育が欠けている。これでは国際的に通用するエリート層は出てこないだろうという、これが「実学としての教養」の非常に現世利益的な一面。「文化の話ができない人間は、自覚のないうちに、ビジネスの上で損していませんか?」ということですね。

ただし、今の意味での「教養」はあくまで、主としてカギカッコつきの教養です。例えばオペラどうのとか、ベルリンフィルがどうのとか、そういう「旧教養」ですね。私自身は、そっちの「旧教養」からスタートした人間ではあるわけだけれども、「ベートーベンが…」といったら、それが教養だと思うような似非教養というものに対しては、私は大変反感を持ってきまして、教養というのは別に「これは教養!」というスタンプをちゃんと貼ってもらっているもの以外でも、幾らでも教養になりうると思ってきました。ただし旧教養についていえば——ミケランジェロでもダヴィンチでも何でもいいですが——、やはりそういうものに通暁するといろいろ深いところがわかることも確かだよという気持ちは持っております。「サブカルだけ」では、オタクにはなりえても、それを教養へとまで持っていくことができるのかなと。

もちろんアニメも深い議論に持っていくことって絶対できるはずだ。けど次のことは言っておきたい。つまり旧教養、例えばベートーベンでも、あの盤とこの盤とがどう違うとか、あの曲の演奏は誰が一番いいとか、それだけに終始しては単なるオタクじゃないかと、いつも私は思ってきた。だからこそ、例えばアニメを新しい教養として議論するのであれば、ベートーベンの専門家方々のオタクとたいして変わらないことしか言えなかった、そういう二の轍は踏まないでね、と思うんです。

私にとっての「実学としての教養」の定義というのは「文化インテリジェンス」です。教養はインテリジェンスになりうる。インテリジェンスというのは、これは一種のスパイのことですけれども、この言葉が日本で人口に膾炙したのは佐藤優のブレイクからじゃないですかね。彼はもともとモスクワで外務

省の情報収集の仕事をやっていた人ですね。彼は現代の怪物的知識人といつていいでしょう。政治政争に巻き込まれて牢屋にぶち込まれて、その間にマルクスから何から何まで読みまくって…という人物です。彼の書いたマルクス経済学とかそういう本をたまに読むのですが、これだけ広く目配りして、かつ普通の門外漢がぱつと読んでああ、なるほどと思うようなものを書くというのは、実は教養に携わる大学の研究者こそがちゃんとやらなくてはならないことだと、いつも思います。

教養というのは結局のところ「文化理解」自分の文化であれ他文化であれ、それを分析的に眺めること、「ああ、この文化というのはこういう考え方をするんだ」とか、「この文化ではこういうものがプラスのレッテルを貼られ、こういうものがマイナスとされているんだ」とか、そういう文化のハビトゥスと感性回路を察知する勘のようなものを養うという、そのためにこそ教養というのは非常に重要だと私はとりわけ最近強く思うようになっております。

この思いを強くしたきっかけというのが一つありまして、戦中から戦後にかけて活躍した日本のいわゆる現代音楽の作曲家に戸田邦雄という人がいて、あまり知られていないんですけども、日本にシェーンベルグの12音技法を初めて紹介したので有名な人なんです。でもこの人は音大を出ておらず、出たのは東京帝大法学部で、正規の仕事は外交官でした。終戦はベトナムで最後の外交官として捕まった人。この人も終戦時ぶち込まれまして、ぶち込まれた牢屋で、たまたまフランス語で書かれた12音の技法の理論書を手にして、他にすることもないから、ずっとそれを読んでいて、抑留が解かれ日本に帰ってからそれを紹介したという、そういう人物なんですね。

この人は、数は多くないんですけども、書いた文章がすごくいいんですよ。一番有名なのは音楽之友社から出ている『音楽と民族性』という、これは実質的に音楽史の本です。そこではいろいろな国が扱われています。ヨーロッパだけじゃありません。ロシアからモスクワ大使、ずっとやっていたから、ロシアの音楽というのがいかにある意味19世紀の半ばまで音楽果つるような国だったかみたいなどころから論じていたり、あるいはアメリカも論じております。しかし、イタリア、ドイツ、フランス、これも論じております。ミニ西

洋音楽史なんですからけれども、私、自分が音楽史を書くにあたって一番影響を受けた本の一つです。

そしてまさにこの外交官であり作曲家だった戸田邦雄は、西洋音楽を外交官＝インテリジェンスの目で見ている。こういう音楽をつくり出してきたこの民族というのは、一体どういう思考回路をしている民族なんだろうという問いが常にある。「ベートーベンが偉いんだ」みたいな話に一切ならない、例えば日本の洋楽導入についても「日本において音楽大学に作曲科ができたのはすごい遅かった。これは何故か」と、江戸時代までの家元制度の伝統のせいである」という発想になる。「日本人にとって音楽をやるというのは、家元がつくった曲を弾くのを学ばせてもらうことなんだという刷り込みが非常に強かったのではあるまいか」と。「だから、明治以降の日本人にとっては、西洋音楽を学ぼう、導入するというのは、大家元であるところのヨーロッパがつくった曲、ベートーベンがつくった曲を聴く、それが西洋音楽をやるということだ」という思い込みが大変強かったのだろう。」言外に「日本で作曲という行為が遅れたのは、家元でもない弟子のくせに曲を作って生意気だという、そういう家元制度が働いたんじゃないか」と書いている。音楽を通した見事な社会の深層心理の分析です。

情報というのは、その情報にへばりついているいろいろなコンテキストといえますか、含意が、結局は一番大事なんですよ。そういうものに対してピンと来る感性のアンテナ。民族の行動パターンとか、あるいは歴史の反復パターンとか、あるいはその時代の気分とか、そういうもの。最後にちょっとだけ、私が最近こういう意味ですごく「ピンと来た」映像をちょっとだけ見ていただきます。

実は、冷戦が終わって以降40年、新自由主義の時代に入ってから、正直、クラシック音楽ってのはどんどんつまらなくなってきたというのが私の考えです。今のクラシック音楽しか知らなかったら、私、クラシック音楽の研究しようなんて思わなかったらと思うぐらい。みんなうまくなっているんだけど、「芸術」として迫ってくるものというのではないという感じがするんですね。新自由主義の時代に入ってから、例えばオーケストラというものが一握りの

世界的な富豪が何か贅沢したような気分になるようなゴージャスサウンドばかりを探求し、今なお生々しく訴えてくる力みたいなのもほとんどないような気がして、私は正直大変絶望してきました。

ところが、今から7、8年ほど前、突如この人が出現したんですね。これはクルレンツィスという人です。ギリシャ生まれなんですけれども、彼はモスクワで勉強しました。そして何を思ったか、シベリアにオーケストラを立ち上げたんですね。シベリアですよ。結局、西側に背中を向けたということですね。シベリアにオーケストラを立ち上げ、このオーケストラがあまりにもすごいので、今度はペルミというモスクワの南東500キロみたいなところですよ。かつて原爆の実験所とかあったらしいんです。かつては強制収容所と原爆の実験所があって、外国人立ち入り禁止だった街らしいんですけれども、このペルミというところのオーケストラに呼ばれて、どうやらロシアのいわゆるオリガルヒが金銭的なバックについてたらしいですね。そしてペルミのオーケストラをレベルを驚異的に上げた。

〈コンサート動画視聴〉

Teodor Currentzis, musicAeterna / Igor Stravinsky. The Firebird

<https://youtu.be/nQ94YB-dYE0>

Teodor Currentzis records / Mozart's Le nozze di Figaro, Così fan tutte & Don Giovanni

<https://youtu.be/UPvugVYv03c>

ちょっと爬虫類系の凶暴な顔ですね。獲物を襲う前のような眼をしている。そして音楽の殺気だち方がちょっと尋常じゃないですよ。だからぼくは芸術（音楽）って言ったって、本来はこれぐらい殺気だった、毒があるものだと深く確信しています。だからこそ彼に熱狂しました。約20年ぶりに本物のクラシック音楽を聞かせてくれる音楽家が現れたと思いました。でも正直「これはやばい音楽だな」と思ったのも事実です。実際彼はインタビューで、「この世界で生きていたくないと思うんだったら、我々はもう一つの世界をつくら

なきやいけない」と言ってるんですよ。「遠いところにエグザイルして、遠いところに逃亡して別の世界をそこに作れ」と。「しかし新しい世界をつくるためには、コミュニケーションと兵士が必要だ」とも。

ちよつとびつくりしますよね。「アナーキーなやり方でもう一つの世界をつくらなきやいけない、そのためにはコミュニケーションと兵士が必要だ」——彼が西側に知られるようになったのは、2015年ごろです。ロシアのクリミア侵攻とほぼ同時なんですよ。2022年（プーチンによるウクライナ進攻）にああいう形で爆発した政治的社会的マグマに思いを馳せずにはおれません。クルレンツィスの音楽の中には、これがもう予言されていた、そんな風に思うんですよ。つまり芸術（音楽）の中に、単なる政治的にニュートラルな美的なものだけでなく、なにか地震の予兆すら感じとるようなセンサー。世界の気配を感じとる感性。それを磨くことこそが教養だと私は考えております。（拍手）

吉岡 今日はいつもの畳の部屋と違って大教室になったので、ちよつと雰囲気の違いが違っていたけど、この映像を見せるためには良かったですね。ぼくは、岡田さんと話をするといつも興奮しながら聞くことが多いんですけども、今日も最後のインタビュー映像は、確かにちよつと「やばい」というのはわかるけども、19世紀から20世紀初頭ぐらいのアーティストって、これぐらいのことみんな平気で言ってたな、とも思います。現代だから「やばく」聞こえる。今はみんな人畜無害になってしまった世界だから。その現代に聞くと、ぎよつとするとところはありますけどね。

今の話は、いくつかポイントがあったと思うんだけど、まず最初の、音楽学が一番虐げられているみたいな話。これはちよつとどうかな。哲学だって虐げられてますからね。それに比べると音楽はある意味、対象があるから。そのタクシーの運ちゃんとはもかく、音楽が嫌いだという人はいないですからね。誰でも何らかの形で音楽には触れている。

それから次のポイントはぼくは非常に共感するところで、要するにオタクではいかんぞということだよ。オタクであることは別に悪いことではないんだけど、オタクというのは何というか、やはり今の世界、新自由主義的な世

界環境に適合している知識の形態であって、そうしたシステムに対して抵抗する力はないということです。

それからその後、佐藤優さん、戸田邦雄さんの話とか、その通りだと思うんだけど、ぼくの観点からどう聞いていたかというところ…そうですね、インテリジェンスということが一つキーワードとして出てきましたが、僕の言葉で言い換えるとそれは一種の「結合能力」というようなものです。それに対してオタク的知識ってというのは、逆にバラバラにすることじゃないかと。バラバラに領域を確定して、自分の領域の中で楽しく暮らすというようなことですね。それがオタクだと思いますが、実は現代の専門主義的な学問でも同じなんですよ。それをオタクとは言わないけれども、オタクみたいなものなんですよ。

つまり結合能力を失って、ある領域に閉じこもってしまう。そうすると、その領域内の精度はむしろ上がるんですよ。面白い部分はあるし、すごいことをやっているかのように本人は思うんですけども、実はその領域を越えた世界の全体性が、全く見えなくなるのです。そうしたオタク＝知識人というような形が、ある意味今の世界に適合的になっているというようなことかなと思って聞いていました。

岡田さんとぼくには幾つかの共通点があって、西洋的知識をベースにした人文学の中でもね、ドイツ的文脈というのがやはり強いんですよ。岡田さんもぼくもドイツの文化や思想に親近感を持っていて、今はもう学部学生とかほとんど読まなくなった、テオドール・アドルノという20世紀ドイツの哲学者——この人は音楽学者でも音楽家でもあるわけですが——の著作に非常に影響を受けています。アドルノはいわゆる批判理論、フランクフルト学派と呼ばれる、要するに新左翼の哲学に属する人なんです。ドイツの批判理論は、今はあまり流行らなくなってきたんです。今読むと、確かに1970年代、80年代に読んでいた時の雰囲気とは違って、やっぱり限界があると思うんです。けれどもアドルノだけは、岡田さんもぼくも今読んでもいいじゃないかというところがあるんです。

今回、岡田さんとかこういうお話をするのでちょっと思い出したのは、アドルノは「教養」ということについて書いているんですよ。一番有名なのは「半

教養の理論 (Theorie der Halbbildung)」、テオリー・デア・ハルプビルドゥングと言われている著作です。ビルドゥングはドイツ語で教養、英語で言ったらラーニングとかエデュケーションという言葉に相当し、教養という日本語はそういう西洋言語を翻訳した言葉だと思います。ハルプというのはハーフで、だから半分しかない教養、中途半端な教養という意味です。今、家にアドルノの本を持っていなかったから、ネットに何かないかなと思って「ハルプビルドゥング」で検索してみたら、ドイツ語のウィキペディアが見つかって、この項目がすごい。6ページにもわたってダーツと書いてあるわけです。内容はほとんどアドルノなんですけれども。

これを参考資料にしようと思って日本語版を探してたけれど、ないんですよ。英語も、他のどんな言語もない。ドイツ語だけなんです、「半教養」という項目が。しかも内容が結構よく書いていて面白いんです。アドルノを参照しながら書いてあるんですけども、教養ってそもそもいつ生まれたかみたいなのが要約してあるんですよ。

それはアドルノの本の中にも出てくるんですけども、教養って基本的に人文学的なベースを持っているので、古典古代についての知識なんですよ。古典的知識なんです。もちろん古典的知識の評価が最初に高まったのはルネサンスです。だから15世紀、16世紀なんですけれども、その次の段階に18世紀の終わりから19世紀、つまり啓蒙主義と市民革命の時代にドイツで新しいヒューマニズムが起こるんですね。シラーとか、それからヴィルヘルム・フォンホルトとかね。それからドイツ観念論。そういうものが中心になって、教養の新しい概念が作られます。

それはどういうことかという、18世紀末から19世紀というのは、初期産業革命が進行している時代です。ブルジョワジーが台頭して、機械的工業生産なんかが始まってくる頃なんですよ。そうすると知的世界には、それまでの古典的教養ではあかんという、そういう雰囲気が出てくるわけ。つまり、もっと政治とか経済とか工学とか、そういったものに関する知識で若者を教育しなきゃだめじゃないかと。せつかく工場をつくったのに、これを動かしていく技術者が育たないじゃないか。そういうニーズが出てきて、それで古典的・

ヒューマニズム的な教養を攻撃し始める時代が来るわけ。そういうヒューマニズムの教養を持っている人たちというのは、旧貴族階級や上層ブルジョワジーなんですよ。

つまり、市民革命で力を得たブルジョワジーの中で、もともと結構金持ちで、植民地で儲けているような人たちは、古い教養を重視する。ところが新興ブルジョワジー、工場の経営者みたいな人たちって、ブルジョワジーでもわりと下の方から出てくるんですよ。そういう人たちは、古典古代の知識なんてあまり子供のときに家で教わってないんですよ。だけれども、やっぱりその時代はまだ古い規範が強いから、それに適応しようとする。つまり、さつき岡田さんが言われた「教養がなかったら、オペラのことをちゃんと語れなかったら商売するときにも不都合ですよ」みたいなことが起こってくるんですよ。それで教養を求め始めるんだけど、それは上層ブルジョワジーの人たちが以前から持っていた、有機的に結合した知識じゃなくて、「ああ、ベートーベンだったらこれね」とか、「この哲学者はこういう名言がありますよね」とか、そういう断片的な、いわば「ファストフード」ならぬ「ファスト教養」で、まあキーワード集みたいなことを憶えてたら事足りるわけです。そういう「教養」が広がっていったことを、半教養と呼んでいるんですよ。

だからアドルノにとって半教養ってもちろん批判的な言葉なんだけれども、そんなのは本当の教養じゃないとか言って批判して済む話でもないということなんですよ。英語だと「スノビズム」という言葉があるじゃないですか。これはほとんど半教養と非常に近い言葉で、スノビズムも同じような歴史的意味を持った、イギリス的な文脈の言葉です。昔はイギリスでも大学なんか行けるのは、すごく上流階級の子弟だけだったけれども、だんだんと下の階級の人も入ってくるようになるわけですよ。そういう学生たちは家庭で子供の頃から古典的教養を教えられていないので、勉強して習得するんです。それを、上流階級の学生が馬鹿にするときにあいつは「スノップ」だみたいな言葉を使った。スノップというのは「靴屋」という意味らしいけど、つまり「靴屋風情の倅が大学なんか来やがって」みたいなことかな。そういうのがスノップなんですよ。

それが現代はどうなっているかと言うと、状況は完全に逆転していると思うんですよね。つまり、いわゆる教養というのが最初からリスペクトされない。今の日本語でも「教養」と言われると、基本的に「ケツ」と思うじゃないですか。「何だよ教養って!」。そういう雰囲気が支配的になっているというか…。確かにごく一部の経営者とかビジネスの世界には、教養的世界は今でもありますよね。けれどもあんまり一般的じゃないというか。昔だったら美術や音楽や文学についての基本知識を持っていない会社の経営者や政治家は、恥ずかしいっていう意識がどこかにありました。今のポピュリズム的な世界の中では全く逆ですよね。むしろ「教養みたいなもんクソだ」みたいに言った方がウケる。「私は教養なんて知らないよ、役に立つ知識しか持ってない」と言った方が大衆の支持を得られるという、逆転した世界ですよね。

岡田 そうですよね。昨日の新聞のオランダで、いわゆる極右政権が政権を取りましたけれども、文化行政大幅カットらしいですね。他のスポーツとかそういうものと並んで。それからベルリンもオーケストラとか、ああいうものは大幅カット、多分AFDとかの台頭なんかも関係しているんでしょうかね。今、やはり教養を目の敵にすると、ポピュリズム的にはウケる時代ですね。

それから、一昔前までの会社の経営者というのは、自分がこれまで蓄えてきたことを文化で還元したいという意識を持っている人が多かったと思うんですよね。それは、我々のような職業にとってはとてもありがたいことだったわけですけども。例えばそうですね、稲盛さんとか、あの稲盛賞を作った。佐治敬三さん、サントリーだってそうですね。いろんな文化行政、文化、メセナやってくれた会社ですけども。それからアサヒビールの会長の樋口さんといったら、小澤征爾のパトロンだったりするんですよね。などなどいっぱい、いたわけだけど、その話をある会社の重役をやってる友人としていたら、彼がポツンと言ったのは、「会社のメセナが最近では文化から環境に変わっちゃったからね」と言っていたんですね。企業の社会貢献の対象が文化から環境の方に移ったのかもしれない。

吉岡 だからぼくは、一時代前までは揶揄されていたスノビズムとか半教養とか、そういうのを今はむしろ何かサポートした方がいいんじゃないかと思うんです。京都大学文学部で10年間教えていたけど、大学って半教養のようなものはある程度必要だと思うんですよ。つまり、世の中には本物の教養を持つ知識人は少ないけど昔も今もいるし、突出したクリエイティブな天才もいるけれども、本物の天才と知識人だけでは、文化というのは成立しないと思うんですよ。その周りにミーハー的な人がいたり、そこそこ優秀な人や、あんまり大したことない人や、教養的な雰囲気が好きでその周りで騒いでいるだけの人とか、そういう多層な人々の生態系があってこそ、初めて文化は成立する。だからスノブは今やあまり悪いものじゃないというか、もっとみんなスノブになった方がいいという感じもするんです。

会社経営者でも確かに教養人はいると思う。その一方で、大学にはどうか。ぼくは京都大学文学部で教えてきたけど、外から見ると京都大学文学部なんて教養の中枢みたいと思う人もいるかもしれません。でもね、全然違いますよ。全然違う。ほとんどの人はエンジニア、みんな専門的知識のエンジニアです。教養人がまったくいないとは思わないけれども、世間で言われてるような雰囲気とは違うし、明治、大正、昭和初期とはかなり違う雰囲気ですよ。ぼくが赴任したとき、パーティーみたいなところで、言語学の先生に「美学って何を研究してんですか」と聞かれて、カントですって言うと、「カントって美学に何か関係あるんですか」と言われてビックリした。言語学の先生だから、近代ヨーロッパの思想史は概略知っているのかと思ったら、自分の専門以外何も知らないんです。ぼくらだって、言語学のことなんて専門的には知らないけれども、主要な言語学者とか、大体こんな感じで発展してきたというイメージが頭の中にあるでしょう。

岡田 ソシユールとか。

吉岡 チョムスキーがいて、だいたいどう解釈されてるとか。専門主義の人にはそういう知識がないんですよ。まあ、ないのは別にいいと思います。い

いと思うんだけど、一番ショックを受けたのは、ないことを全く恥じていないんですよ。ぼくは、恥ずかしいんですよ。自分の専門でなくても、例えば岡田さんとこんな対談する時、西洋近代音楽のことを何も知らなかったら恥ずかしい。

岡田 反知性主義ってよく言われますけど、足元の大学内ですら…自分の専門以外は知りません、専門的な論文を書くだけです、他分野はわかりません、わからないから発言しませんといったタイプの方は…非常に多いでしょうね。これも反知性主義ですよ。

吉岡 ぼくなにか修士課程の院生の時に怒られたもん、論文書き過ぎだつて。『現代思想』みたいな思想雑誌に載せたりしたら、指導教授に怒られた。しょうもないことするなつて。つまり論文を書くなつていうんですよ。哲学の論文なんて、1年に2本も3本も書けるものじゃない。書けるとしたらそれは絶対ニセモノだ。その通りかもしれないけど、その通りであると同時に、その先生も自分が仕事をしない人だったから、あんまり学生に仕事をされるのが嫌だつていうのもありましたけれどもね。けれども、基本的には正しいと思うんですよ。哲学の研究なんて業績を作るのは関係がない。東大の初代美学教授の大塚保治なんて、一生1冊も本を書かなかった。

これはどういうことかということ、アドルノの本にも書いてあるんですけども、1800年代の教養の理想というのは、何のためかということね、社交なんです。会話というか、社交における会話が一番大事なんです。これはさっきの経営者の人が、いろいろ音楽とかビートルズを知っているというのも、会話のためなんです。つまり、そういう社交という世界が成立しているときには、教養ってちゃんと生きているわけ。今は社交って存在しないと云うと言い過ぎだけど、あることはあるんだけど、重んじられていないですよ。

岡田 「会社のエリートにとっても教養というのは実は大事なんじゃないか」と言ったとき、言いたかったことの一つがまさにそれで、仕事の契約の話だ

けて会話がおしまい、ではなくてもっと会話が続けられた方がいいよねという話です。そういう時にいろいろ話のネタがあると、続くでしょうということなのですよね。必ずしもダヴィンチでなくても構わないけれども、この人はどういふところに関心のアンテナがある？ この人職業はこういう職業をやっているけれども、他にどういふ趣味の領域、好きなものの領域を持つてらるう？ と。アタリを待つといふか、相手が反応するよな領域つていふのがわかつたら、ああ、なるほど、この人こいう性格で、こいう仕事をやってて、実は好きなものといふのはこいうところにあるんだと類推が効く。インテリジェンスといふのもこいうニュアンスで言いました。教養といふのはやはり実学だといふことですね。よくブリア＝サヴァランといふ有名な18世紀の美食家が書いたエッセイの一節を思い出します。「あなたがどういふものを食べてるか言つてみたまえ、あなたがどういふ人か当てて見せよう」といふのがあるんですよ。教養つてそいうとこありますよね。

吉岡 それが、実学。とすると、虚学といふのは存在しないといふことだね。そいう意味で実学だといふのは非常によくわかるんだけれども、僕の言い方で言うと、いろいろなところ哲学とか美学とかの知識つてどう役に立つんですかみたいなことを聞かれるとき、今まで納得してもらつた答えは何かといふと、それは知的な体幹を鍛えることだといふ喩えです。スポーツで、体幹を鍛えるとかいふでしょう。体幹だけ鍛えても別にテニスが上手くなるわけじゃないけども、逆にそれを鍛えておかないと、いろんな演技とかやつた時に怪我したり、体幹を鍛えることで危険が防げるし、上達する基礎になる。そいう言い方をしたら、みんななるほど、と納得されました。ちよつと納得されすぎて、これでいいのかなとも思つた。これが実学といふことかもしれないけど…。

岡田 究極の実学じゃないですか。そいう意味じゃ、体幹を鍛えるといふのは。そこが伝わつてなかつたら、何もそこから出てきません。

吉岡 体幹だけ鍛えて何にもできないつていふのも、ちよつと…（笑）。

岡田 スポーツで実際使う筋肉ばっかり鍛えてたら、えてして、過ぎてバランス壊して調子壊したりするでしょ。

吉岡 え、そうなんですよ。哲学者って体幹だけ鍛えている人みたいな感じかな（笑）。

岡田 哲学者というのは、元々はプラトン以来、対話の名手だったわけです。吉岡さんに至るまで。対話するのが商売。

吉岡 プラトンは書いたけど、ソクラテスは書かなかったからね。

岡田 カントだって、ケーニヒスベルクの貴族令嬢たちと会話していたわけだし。

吉岡 カントは本当に、いろいろな階層の人と食事するのが彼の一番重要な活動だったんですね。

岡田 それからデカルトも結局パトロンを求めて亡命とかしますよね。最晩年はスウェーデンの王女のお話相手になる。実はあらゆる学問にとって、お話相手ができる能力って基本中の基本なんだよね。それが教養なんだと思います。今の大学っていうのは非常に残念なことだけど、専門家の間に「お話」＝対話がないんだよね。同じキャンパスにいるんだけど家庭内別居している感じ。喧嘩すら起こらないという、そんな感じです。

吉岡 冷たい感じだよね。

岡田 そういう意味じゃ京大の場合だと百万遍あたりの喫茶店とか飲み屋文化ってのが急速に衰退したという印象をぼくは持っているんですけどね。あの辺の飲み屋街、喫茶店街というあれが京大の文理融合的ないろんな諸学

の間の対話の場に期せずしてなっていたんだけど、あれがやっぱり痛かったんじゃないかなと、そう思ったんです。

吉岡 ある時教授会の後で、そんなに大学本部がうるさく言ってくるんだったら文学部だけ独立しましょうと、冗談で言ったことがあるんです。独立はできるんですよ。京大文学部だけだったら、授業料収入で維持できるんです。だって実験器具とか要らんでしょ（笑）。実験心理学とかは要るから、そういうのは切り離して。本はもう十分あるんですよ。だから独立できる。そしたら本部の言うことも文科省の言うことも聞かなくていいから、好きなようにやっていける、みたいなことを何人かで言ってたけれども、全く相手にされなかった。

岡田 独立運動ね、でも独立運動するためには、社会のサポートが必要で、社会のサポートのためには専門家だけで閉じていたら絶対話は始まらないわけで。例えば日本史のファンって必ず一定数いますよね。あるいは古代史のファン。こういう意味での教養的なものに対するファン層というのを少しでも広げるというのはすごく大事なことだと、いつも思っています。

吉岡 あとパトロン。

岡田 そうですね。それもかぶりますよね。

吉岡 このペルミの人も、そうそう大富豪がついているわけでしょう。

岡田 これは何かオルガルニヒ系の銀行がパトロンについているという話です。それはプーチンに大変近いところにあったそうです。で、コロナが起きてから、やっぱりそのことが明らかになって、クルレンツィス自身、旗幟を鮮明にしなかったんですよ。プーチン反対みたいで言わなかったんですよ。まあ、西側では完全ヒール役（悪役）になってしまいましたね。

でも、こういう演奏を聴くと…。こういう演奏が西側では絶対不可能だった。この20年、30年、ここまで殺気だったというのは生まれなかった。つまりこの人の練習のさせ方って、多分ハラスメントもへったくれもあるか、芸術の真実を追求するためだったら死ぬ気でやれという感じでしょうね。

吉岡 こういうことは、他の場所でもこれから出てくるんじゃないかな。他の分野とか美術だって、国際的な美術展というのは、盛んは盛んですけれども。まあ、言いにくいけど、金の匂いしかしないですよ。ぼくらが知っている身近なところでは面白いことをやっている人はいるけれども、そういうものと全く離れたところで、巨大な資本で動いているものばかりが目立っているという感じだから、もうギリギリまで来ている感じがする、世界的に。なので、いろいろな形で出てくるだろうなとは思っています。

植田 今30分ぐらいですので休憩になります。お二方に拍手を（拍手）。ありがとうございます。

* * * * *

植田 それでは、再開したいと思います。吉岡さん、何か最初にコメントされますか？

吉岡 さっき一つだけ聞き忘れたことがあったんだけど。見せてもらった例で「やばい所もある」という意味は、そういうコミュニケーションと軍隊みたいな方向性だけじゃなくて、こういうものですら、すぐに巨大な文化産業に取り込まれてパッケージ化される危険があるという意味もあったのかな、そのことが気になっていました。

岡田 クルレンツイスが西側でも大センセーションを巻き起こして、もう至る所で切符売り切れでしたからね。日本にも一度だけ来ましたが、あつ

という間に売り切れ。今めつたにないので、私、聞きに行きましたけれども、それはもう三日三晩ぐらい寝られないぐらいすごい音楽だったことは確かなんです。

ずっと危惧を持って見ておりました。こうやって文化産業を西側に取り込んでいかれないか、西側資本主義を甘く見ないでくれよと思っていました。ちょうどそういう時に、コロナがおきて、そして2022年のウクライナ侵攻があつて、クルレンツィスはやっぱりプーチン寄りっていうのはかなりアレだったので。西側ではヒーロー役になっちゃつて、で、あんまり音沙汰を聞かなくなりましたね。

ですから私、今回この彼をめぐる一連のことで一つ思ったのは、芸術のアバンギャルドっていうのは、必ず現実世界で何かが起きる前の予兆として生まれるんだな、ということが一つ。現実世界で何かが起きてしまうと、もう何か現実で起きていることの方が、はるかにその芸術的なビジョンを超えてしまつて…。この状況でクルレンツィスは何ができるだろう。結局のところ、彼は現実のカタストロフの前座役、旗振り役だったのかなという印象もちょっと受けました。

吉岡 坑道のカナリアみたいに。

岡本 坑道のカナリア、まさに。第1次世界大戦の前の未来派とかいうものをちょっと連想しましたですね。

吉岡 (会場に向けて) いかがでしょうか? どんなことでも。

質問者A 講演とは直接関係ないかもしれませんが、岡田先生の御著書とか講演とかがすごく好きでよく聞いているんですけど、先生が文章を書く時とか、意識されてることとかがあつたらぜひ聞きたいなと思ひまして。

岡田 私は書くときに意識しているのは、できるだけ高校生でもわかるように、ということ。そして心がけているのは、文章を声に出すことです。声にして

いない文章、読むだけの文字というのは身体がないんですよ。文章にだって呼吸感があって、それが文章をわかるようにする。呼吸っていうのは文章の中の最も身体的なものだと思うんです。

質問者 A ちょっと関連することですけども、生成AIとかでか、最近文字がいっぱいだったらと出てくると思うけど、ああいう文章だとやはり先生の手書かれる文章とは違って…。

岡田 生成AIとかの文章は、文字通り「腑」に落ちないですよ。腑に落ちるって上手い言い方ですよ。身体の真ん中あたりに落ちる。でも生成AIの文章には呼吸がない。

吉岡 他にどうでしょうか？

質問者 B 私、一般の会社員をしておったんですが、一時期。その会社、自動車販売店で販売店の社長さんもおられたんですけども。ぼく自身は、文化的な話も好きだったんですが。そういう環境ではなくて。大学の友達とかとは話をしていたんですが、実業界でそういう話は特にないから。そういうお話は、普遍的でしょうか？

岡田 日本の会社文化というのは確かにすごいマッチョで。やっぱりベースにあるのが体育会系だといって必ずしも外的外れにはならないだろうなあ。そしてマッチョ体質というものの中には、反教養主義的なものが潜んでいるだろう。そんなことよりは酒をどれだけ飲めるか、ゴルフにどれだけ付き合えるか、みたいな。そこから変えなきゃという気持ちが入り込んで強くなる。そのバランサーとして、ぼくの印象ですけども、かつては総じて男よりも女性の方が教養的（少なくとも旧教養的）なものに開けていた。ですが資本主義が行き詰まって、みんなで働け働けになってくると、もう社会の中の教養的（旧教養的）なものを涵養するスペースがどんどん狭くなっていくのかもしれない。

教養の衰退を考える時にジェンダーの問題、あるいは性の問題は盲点になっているのかもしれませんが。今でもそういう文化が何かしらあって欲しいと思うし、アートとかがそれなりにその役割を果たしているんじゃないかと希望を託したりするんだけど。ぼく自身が知らないもので。

吉岡 今、「アートコラボレーション・京都」やっているんですが、3、4年前にその企画で天野太郎さんというキュレーターの人と対談した時に、司会者が天野さんに「どうしてそういう美術とか芸術の道に入ったんですか？」みたいな話を聞いた時に、彼は高校の時に好きな女子がいて、その子がクラシック音楽が好きだということを知っていたんだって。それで自分はクラシック音楽を全然知らなかったんだけど、彼女と話を合わせるためにはやはり勉強しなきゃと思った。しかしその子はファンって言うんだから、天野君何聴くの？とか聞かれるだろう。その時にモーツァルトとかベートーベンとか言っているようではダメだと思って、音楽雑誌とか読んで必死に勉強して、「バルトークが…」とか言ったんだって。

何かそういう女の子の歓心を得たいというのももちろんあるし、それからぼくなにか、学部時代に大学の演習発表とかで議論とかするじゃないですか。結構今と違って、先生や先輩にきついことを言われるんですよ。その時負けないようにいいかっこするためには、相手が言ったことも知っているふりして、「いやあ、あれはね…」みたいな感じでドキドキしながらハツタリを言って、家に帰って必死で勉強したりした。そういう動機の不純さみたいなものが、教養形成の時には重要な役割を果たしているというのは確かだと思いますよね。

今のご質問で考えたのは、確かに会社の仲間と文化的な話がしにくいということはあるんだけど、これは自分もできないことを前提に言うんですけど、そういう話をしようとしているこちら側の迫力というか、ある種の凶暴さというか、それが不足していることも確かかなと思うんです。

たとえば中原中也って、とんでもない人物ですけどね。屋台みたいなところで夜飲んでいる時に、横に職人さんかな、教養とは無縁のような男がいて、

酔っ払ってきて話をする。もちろん詩人だなんて言っても通じないんです。でも泥酔してくると、中原はその人にヴェルレーヌがいかにかすごいかっていうことを理解させたい、理解するはずだと思うんだって。それで「うるさい」と言って殴られて「どうして理解できないんだろう？」って泣くんだって。アホかとも思うけど感動するんです。

ぼく日本学術会議という組織の人文社会科学分野に属してるんですが、そこでいかにして人文社会科学の魅力を社会にアピールするかみたいな議論があるんですよ。だけど、それ最初から負けているなと思うんです。つまり、テクノロジーとか経済だけじゃなく、人文社会科学も大事にしてくださいって言う言い方では、負けていると思うんですね。そうではなく哲学や文学こそが中心なんだってというぐらいのめちやくちやなことを言えば、相手はひるむんじゃないかなと思うんですよ。

岡田 まあ、ひるませる。もつと強気に出る云々ということで、ぼくはすごく思うのは、やっぱりこのマッチョの世界というのは、アンチ教養的な空気が、昔からあった社会だと思うんですよ。少なくとも日本社会というのは昔からその傾向はあった社会だと思うんですけども、やっぱり女性の方が何かを変えてくれないかという待望はすごくありますよね。男よりは女性の方が絶対一般論としては開けているという気持ちがあつてね。

吉岡 じゃあ女性の方はいかがですか？

岡田 おっさんばっかりだとゴルフの話しかないみたいなね。それでは貧しい。

吉岡 いや、他のことでもいかがですか。

質問者C すみません。京都芸術大学で芸術学を学んでおります。冒頭にありました先生のまず最初の課題図書から始まりまして、ずっと追っかけをさせていただいております。伊丹の先生の酒蔵コンサートも行かせていただき

ました。ありがとうございます。

私、3年編入で入りまして、卒論のテーマを「STEM（ステム）教育からSTEAM（スティーム）教育」ということで、サイエンス、テクノロジー、エンジニアリングの様にアートがつながってSTEAMになっているにもかかわらず、プログラミングのことがばかり話題になっていますが、アートが全然ほったらかしになっているんじゃないかというふうに思っております。

今なくなって一番いい科目が音楽だということで、第3位が図画工作美術だということで、アートは一体どこに行ってしまうのかということで、芸術学を学んでいる側としましてはどうしたものかと思っております。調べますと、学校教育の中の音楽鑑賞なんか、私が聴いていた頃と全然変わらないようなラインナップで、武満さんの曲がちよっと入ってくるぐらいかなとか。で、最近レーマンが入ったり、最近の曲が入ったりはしてますけれども、ああいうのは一部の出版社がこだわって作ってらっしゃるみたいなことで…。

子どもたちがずっと音楽を学んでいくに当たって、基礎となるようなところを教養の素地になるような部分、そういうあたりを先生のお考えを今回ぜひともお聞きしたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

岡田 吉岡さん、美術の方について、同じ問いに答えてね。日本人は明治以来、音楽でも西洋に追いつけ追い越せでやってきたわけですよ。で、それはそれでいろいろ問題はあったけど、方針がはっきりしていたことは間違いない。それは要するに、「音楽を学ぶ＝良き市民になる」ということだったんですよ。とりわけ戦前がそうだった。明治・大正期は、国のお偉いさんなんかは、「国民が民謡なんかを歌ってるのを外国人に見られると恥ずかしい」という劣等感をすごく強く持っていて、だからこそドレミファソラドできちんと（もちろん、カギカッコつきのきちんとですよ。）歌えるように小学校の時から教育しましょう、そうやって日本にもちゃんと一等国としての市民がいるぞということを対外的にアピールしましょうという意識が非常に強かった。当時の明治政府にとって音楽は国策だった。

そこから「ベートーベン立派なものだ」とか、そういう西洋音楽崇拝が始

まっ、それは戦後においてもずっと続いていたと言っていいでしょう。ぼくが子どもの頃は、1クオーターに必ず一人のピアノの先生がいましたし、音大があんなにたくさんあったのだから、要するに音大できちんとピアノを弾ける教養を身につけた市民を作るといって、戦後の民主主義の国策にピタッと合っていたというところがある。それはそれでいろいろ問題があったと思うんですけど、でもね、軸がはつきりしたからこそ、それに対する反抗が可能だった。そして反抗から面白いものが出てくるといういい部分もあった。反抗が豊かな果実をもたらすためには、権威がとにかく一本ドーンとあることが必要なのかもしれない。今はそれがなくなってしまっていますよね。それ自体はいいことだとも片方で思うんだけど、じゃあそれで何かクリエイティブなことが出てくるか。「みんな自由に好きなことやっていいですよ」「好きな音楽聴いていいですよ」「何してもいいですよ」という、強制なしに何か本当にクリエイティブなことが生まれるだろうかという疑問は、実は非常に強く思っています。昔がよかったと一概に言うつもりは全然ないし、今が悪いという気も全然ない。今の自由というのは大変貴重なものだとも思うけど、でもそこから先が見えません…。

吉岡 美術で…、そうですね。教育という場面に関していうと、やはり今一番大事なのは先生をもっと自由にしてあげることだと思うんですよ。これは別に芸術教育だけに限らず。だけど何をやってもいいという何でもありの自由じゃなくて、具体的に言うと、ぼくが受けたような中学高校の美術や音楽の先生って、自分の好きなことばかりやって、非常に偏りがあったんですよ。だけど、その先生が例えばこれが好きだと…。ぼくが美術を習った先生ってシュールレアリストだったんですよ。そういう雰囲気のを描くと褒めてくれたりとか。

そういうのは、偏ってはいるけれども、その先生が本気でこれが好きなんだなというのはよく伝わってくるんですよ。将来、生徒はそれと違うことを全然やっていいわけだけでも。今は先生ががんじがらめに縛られているから、偏りがあるとすごいクレームが来るわけですよ。そうすると、満遍なくね、何でもいいみたいな話になる。これもある、あれもあるみたいなことを中立的に教える。

何か自分の持っている芸術観とか政治的意見とかも入れちゃいけないという
ようなことだと、結局子供が学ぶのは、大人は何にもコミットしないで生きる
のが賢い生き方なんだなということしか覚ええないですよ。これが最悪で、だ
からといって何でも許せばいいというのじゃないけれども、せめてぼくが子供
の頃だった昭和30年代、40年代ぐらいのゆるさのレベルに戻すことがすご
い大事だと思うんですね。自分が経験したからそうえ思うのかもしれないけど、
あれぐらいがわりとバランス取れてたんじゃないかなと。

もちろんそれは背後に経済成長があったから余裕があったんですね。それ
から美術でいうと、日本の美術教育は音楽と同じで、やっぱり国策で取り入
れられて非常な歪みを持っているし、しかも西洋近代美術というものの規範
をいっぺんに取り込んだから、要するにヨーロッパにおいては段階を踏んで
弁証法的に進んでいった論理をガーッといっぺんに持ち込んだ。山田五郎
さんという美術のユーチューバーがいるじゃないですか。昨日たまたま観たら、
あのデッサンをやる石膏像ね。あの文化って今、世界中であるのは日本と韓
国だけらしいんですよ。石膏デッサンって、あれはさっき言った古典主義なん
ですよ。古典主義なんだけれども、今西洋世界がもうあんなもの全然重視し
てなくて、日本だけ。韓国にもあるのは日韓併合の時に日本から入ったから
なんですよ。結局日本だけなんですね。

確かに石膏デッサンを入れたのは、黒田清輝が張本人らしいです。でも
黒田自身はもう古典主義じゃない。だからその入れ方が、古典主義でありな
がら個性も出せみたいなの。つまり両方一緒に入れちゃうんですね。だから
もう全体が非常に歪んでいる、歪んでいるんだけど、そんなの世界でやっ
てるのは日本と韓国だけだとしたらユニークでもある。これはこれで150年経っ
たら、立派な文化的基盤になっているんじゃないかという話です。

つまりこれって日本が西洋からいろんなものを取り込んで、例えばパン食
とか取り込んで、今、日本の食パンとか世界中で人気じゃないですか。たし
かにあんなもの他の国にないんですよ。ぼくが小中学生ぐらいの時には、日
本のパンてまずかったから、その後外国に行って、ああ、これが本物のパン
の味だみたいなのがあったけれども、今や逆転していて、ぼくの友人のフラン

ス人は、世界で一番バゲットが美味しいのは神戸と京都だと言ってますよ。値段は高いけど。何でも時間経ったらそれが文化基盤になり得るんだなという感じがする。

岡田 今の話でちょっと思い出したことがありました。この話の中にもちょっとしゃべった戸田邦雄という作曲家で外交官だった人が書いてたことなんですけど、ロシアと日本というのは西洋音楽の取り込み方が似ている。つまりどちらも近代化が遅かったけれども、実は近代化は遅れていた側の方がショートカットが出来るというんですよ。時間をかけてじわじわ時間軸上で近代化するんじゃないで、一気に何もかもどーんを入れる。アメリカもそうだと言っていたな。アメリカやロシアや日本というのは一生懸命ヨーロッパの近代に追いつこうとしてショートカットを模索したから、超近代にも行きやすいんでしょう。ポストモダニズムとか呼ばれる状況は、ロシアとかアメリカとか日本でむしろ先取りされていたのかもしれないですね。カタログみたいに異質な文化がずらりと並んでいるかんじ。

吉岡 一概にね。ぼくが若いときには、やっぱり近代主義的な批評家は、日本の不十分な近代化だみたいな批判をしていたけれども、何か時間が経つとこれが面白いじゃないかみたいなのが出てくる。

岡田 それで今の外人観光客なんか日本へ来て面白がるのも、ひよっとするとそういう感覚なのかもしれないな。

吉岡 それはあると思いますよ。もう今のぼくの年代ではちょっともう見えないような部分で相当広がっている感じはする。

岡田 待望しているのは、ぼくらにはついていけないような現代的現象の中で育って、その中に同一化していると同時に、それをぼくらのような旧世代に理解できる言語で橋渡しができる若い人が出てくることだなあ。そういう

世代の人たちの本を読んでも、何となく「年寄りにはわからないでしょうけどね、流行ってるのはね」みたいな感じで話が進められている気がして。ひがみかもしれないけど。

吉岡 自分だって若い時にそういう態度をとっていたじゃない。

岡田 そう思っていたんですよ。それをちゃんと自分でフォローしようと思っていました。ぼくらだってそう思っていました。

吉岡 年寄りには、分からんみたいな。

岡田 やはり年寄り世代に媒介して欲しいなとすごく思いますね。ぜひぜひお願いします。

吉岡 いや、でも何かぼくらの若い時に年寄りなんかにはわかるかと思って、新しいことをあえてやったり研究したりしていたのに比べると、今の若者は何か優しいというか、あまり突っかかってこないですよ。

岡田 そうか、全く突っかかってこないというのが逆に意思疎通のコミュニケーションを控えられている感じもするよね。

吉岡 喧嘩を売られても一応相手にしているということなんだと思うので。私自身、今は何かもうちょっと冷たい感じで、老害なんだから早く死ねみたいなね。

岡田 「早く死ね」ですらなくて、ひたすら自分たちの世界の中にいるという感じをぼくは持ちますけどね。あまり一般化してはいけないかもしれないけど。

吉岡 他にはどうでしょう？ 時間までありますか。あと一人ということで。

質問者D 思いつきなんです。ヘンリー・ミラーという作家さんがいましたよね。北回帰線の話を書いた頃読んで…。彼は作家をしているのだが、普通の意味で働いていない、パトロンのお客になって、飯を食わせられている。そして、叛逆的な小説を書くんですけど、すごいですけど。教養があつて対話がすごくうまくて、パトロンを楽しませるようなお話を振っているのはすごく上手だったんだろうと、今のお話で。そういうのは自分の創作をする上でも、生活する上でも役に立つんだろうなと。実践的な意味合いは非常にあるものであると再認識しています。

吉岡 そうね。ヘンリー・ミラーだけではないけれども、あれはそういう自分の生きざまみたいなものと、文学が切り離すことができないようなタイプの作家。それは音楽でもそうかもしれないけど、確かなかなか生息しにくい社会ではありますよね、今は。現在では、ほとんど犯罪に近いことをしていたからね、ヘンリー・ミラーなんて。

岡田 ぼくが思いつくのはワーグナー。王さまをたらしこんでバイエルン王国が財政破滅するぐらいのお金を使わせて。作曲家として偉大じゃなかったら、ただの詐欺師。そういう意味では芸術家っていうのは芸者すれすれ、ある意味詐欺師すれすれ。

それはともかくとして、今でもそういうパトロンができるはずの大金持ちっているはずですよ。でも、なんでイーロンマスクは芸術に投資しないんだ？ と。

吉岡 興味ないからだと思うよ。ツイッターとかマクドナルドを買収する方が絶対面白いので、彼にとって、今の世界では。

岡田 どうしてだと思ふ？は宇 今は芸術じゃなくて宇宙旅行になるでしょう。SPACE-X。それから不老長寿。

吉岡 でも芸術とは呼ばれないけれども、SPACE-Xのブースターを回収す

る機構とか動画で見ていると、相当感動するよね。ある意味、芸術的感動に近いものを感じますよね。そこで美的な満足を得ているというか、それの方が芸術より面白いと思っているんじゃないかな。

岡田 ひよつとすると我々が芸術という枠をもっと広げなきゃいけないのかもしれないね。イーロンマスクは現代のメディチ家である。

吉岡 宇宙開発とか巨大テクノロジーとかいうのは、やっぱり見せることにもすごい大事な側面があるじゃないですか。みんな感心するわけでしょ。昔だったらああいうものを、芸術って呼んでいたんじゃないか。テクノロジーと思っただけなら見ているけど、巨大な直径数10キロまである加速器とかね、チリのアタカマ砂漠にある巨大な電波望遠鏡って、見ようによっては芸術作品です。

岡田 それで、今思っていたのは、ワーグナーがニーベルングの指輪なんかで、世界の破滅とか、ああいうものをステージに乗せようとした。

吉岡 それに近いものが…。

岡田 ほぼ一緒。歴史的に見れば、ワーグナーとイーロン・マスクの間をつないでいるのは映画監督だな。『スターウォーズ』とか。イーロン・マスクが芸術の系譜の中にちゃんと位置づけられるかもしれないなんて、全く考えたこともなかった。

植田 はい。それではちょっと時間もちょうどいい時間になりましたので、今日の会をおしまいにしたいと思います。岡田先生、吉岡先生、本当にありがとうございました。（拍手）



2024年11月2日（土） 於：京都市立芸術大学 講義室1

12の対話実行委員会 (TWD)

2024